

職場の日々

「学生。をプロデュース」

立命館大学産業社会学部事務局

小倉 浩幸

二〇〇六年四月、三年ぶりに、学生を相手にした仕事に復帰しました。しばらく、教職員組合の専従役員を務めていたので、毎日が理事会との折衝に追われていたことを思うと、人間相手の仕事に戻り、しかも自分の出身学部ですから、内心、感慨もひとしおです。

私の学部は「産業社会学部」と言います。一九六〇年代はじめ、日本が高度経済成長の諸矛盾を抱えていた頃、その解決をミッションとする総合的社会科学部として、今で言う「学際系学部」の走りとして設置された学部です。学生にとっ

てみれば、社会と人間に関わる現代的課題であれば何でも研究テーマにできる学部ということ、また、そういう学部であるからこそ多種多様な学生が集まっており、課外活動や社会活動で活躍するユニークな学生が多い、そういう学生が活躍できる学部ということから、学部名を、親しみを込めて「さんしゃ」と略し、「パラダイス☆さんしゃ」と言ってきました。学生四千五百人、教員八十人、職員(多様な雇用形態を含め)三十人という、巨大な学部です。多くのアクティブな学生がいるとともに、「パラダイス☆さんしゃ」、略して「パラさん」の言葉がかもし出すような雰囲気にも馴染みなかったり、思春期的な発達課題を積み残してきている学生たちも少なくありません。でも、そういう多様な学生たちが、次のステージへ進むための、それなりの「居場所」でありたいと思って働いています。

新入生を大学生活に迎え入れる

「オリター」の役割

「オリター」という制度があります。上回生の学生たちが自主的に新入生をサポートするグループで、すべての学部にあります。少しずつ活動内容が違っており、産業社会学部では「エンター」といいます。本来の由来はともかく、名前の響きから、他学部に比して、エンターテインメント的な活動が多いのが特徴です。

※オリター制度について、詳しくは、『大学と教育』No.二十三掲載の拙論で紹介しています。

十一月に翌年度のエンターが募集されます(学部が募集しているわけではありません。前年度のエンター団執行部が引き継ぎとして取り組みます)。産業社会学部では、多い年だと四百人近い希望者が応募することありますが、定員があ

り、百六十人くらいに絞らざるを得ません。この応募には学部は関知していませんから、選考ではなく抽選で決められます(学生の中には、そして教員の側にも、本当は選考したいという意識もあるのでありますが、学生が自主的に取り組んでいることとであり、「学生が学生を選ぶ」ことはやはり難しいということで、抽選になっています)。ちなみに百六十人くらいという定員は、翌年度の一回生のクラス数に、一クラスあたり四人ないし五人のエンターを割り当てる、という勘定です。つまり、一回生クラス(「基礎演習」といいます)に、このエンターたちも関わらなければなりません。

十一月に募集し、抽選を経てメンバーが確定すると、まず「規約」を承認します。そして、「エンターを考える会」という会合を繰り返し設けて、メンバー間での「エンター」の役割や位置づけなどについての共通認識をつくっていきます。そして執行部メンバーを募集して全

員の承認を受ければ、前年度執行部の役割が終了します。新たに選出された執行部は、一月から二月にかけて、この間の「考える会」の議論を踏まえ、活動方針を作成し、全体の会議に諮って確定していきます。

個々のエンターは、四月以降前期中は、主に担当する「基礎演習」クラスでの活動が中心となりますが、エンターの中から希望者を募って新入生歓迎行事を企画・実施するグループを、団内に構成します。この数年は、入学式の事前に新入生がキャンパスライフに慣れるとともに友人づくりをする「プレ・オリエンテーション」、「基礎演習」クラスのリーダー的學生を集めてリーダーシップやリーダー集団づくりをすすめる「フレッシュマン・リーダーズ・キャンプ」、産業社会学部の特徴であるアクティブスタディのスタイルの一つであるフィールドワーク&プレゼンテーションを回生全体で実践体験する「Study with Pleasure」の三企

画、それに加え、クラス担当のエンターではなく新入生歓迎行事を専ら担当する「フレキシブル・エンターズ」の4つが立ち上がります。

四月になる直前に、学部として、「基礎演習」担当教員とクラス担当エンターとの全体的な会合を持って、前期中の「基礎演習」の進め方などを確認していきます。オリエンテーションの運営・クラス役員の選出、授業としての「基礎演習」のモデルを提示する「エンター・プレゼン」、新入生歓迎祭典でのクラスごとの出店、クラス合宿の実施などをサポートします。このほか、全クラスではないですが多くのクラスで、クラス独自のユニフォームやグッズづくり、クラスメンバーの「お誕生日会」、さらにクラス対抗の行事、そして最後には、前期のクラス活動の折々で撮影してきたビデオを編集して上映するなど、実に多彩な活動をしています。

もちろん課題や改善すべき点もあるの

ですが、やはり、大学での学び方、大学生活の組み立て方について、多くの学生に「知恵」を継承する、大切な役目を担って来ています。

「パラダイス☆さんしゃ」を

「砂漠化」させない機能としてのエンター

同時に、このエンターは、学生生活の知恵を継承するにとどまらず、学際系巨大学部が散漫四散しないよう、そしてその中で学生たちが「さんしゃ」アイデンティティをロストしないようにするとうう、さらに大きい役目をも、結果的に担って来ています。

高校の大学進学指導では、やはり偏差値がひきつづき重視されている一方で、早くから「大学でやりたいこと」を決める指導が強化されているようです。すると、特に学際系学部では、積み上げ方のディシプリンをなぞるといよりも、やりたいテーマに早く取り組みたいという

気持ちが強くなりすぎて、しかし、そのテーマには低回生時にはカリキュラム上触れることができず、むしろ、最近の学改革のトレンドとして、やりたいテーマとは切り離されたスキル形成こそが追及されるということで、どうしても入学時のモチベーションが続かないようです。あるエンターが、「入学から二年間かかって下がりきったモチベーションが、三回生になってゼミが始まり、ようやく回復しつつある。でもすぐに就職活動に入ってしまう」とその問題を端的に言ってくれました。

エンターを務める学生たちの多くが、このことを直感的に感じているようです。そして、「自分が新入生の時に出会った先輩学生(エンター)のようにアクティブな学生生活を送りたい」という積極面と、「もしエンターになれなかつたら、二回生になったら大学に自分の居場所がなくなるような気がする」という漠然とした不安感との絶妙のブレンドが、多く

の学生に「エンターになりたい」と思わせています。

逆に言うと、多くの学生が、潜在的にはよりアクティブ&ポジティブに学生生活を送りたいという要求と、しかし、なかなかその方法がわからない、飛び込んでいく決意ができきらないという不安と、その両方を抱えているということであり、大学にとっては、学生のサポートのし甲斐がある論点であるということではないでしょうか。

ゼミなどの各グループが他流試合をする「ゼミナル大会」は、かつてない参加者を得ました。産業社会学部の学生自治会が、エンターにつづく新たな学生プロジェクトを募集したところ、上回生の特にゼミ間の交流がしたい、男女や得意・不得意を気にしないでいいスポーツ大会をやりたいたといった要求を持った学生たちが四十名近く集まりました(すぼりつつ団)。また、もつと学生が主体的に学べる雰囲気や授業づくりをしたいとい

う学生たちが、一回生を中心に、十五名近く集まりました(まなびつつ団)。多少、手前味噌なことを言うが、私もアイデアを出していますが、しかし、「パラダイス☆さんしゃ」を一步、学生の手で前進させることになるのではないかと、とひそかに、しかしかなり強く、期待して見えています。

男子学生はCawaii

ところで、事務室で働いていると、実に多くの学生たちと出会うことになりませんが、おそらく自分たちが学生のころにはなかったようなかわり合いが、今の学生たちと、意外と言う点では特に男子との、しかもかなうり他愛のないかわりが発生します。その一端を。

H…「小倉さん」

二階の渡り廊下を歩いていると、顔見知りの男子が1階から叫びながら階段を駆け上がってきました。

H…「いっしょに写真撮ってもらっていいですか?」 O…「ええっ、何で?」

H…「あ、あと、写真の端に一言、メッセージも書いてもらえますか?」 O…「そやから何すんの?」

H…「明後日、彼女の誕生日なんで、みんなからメッセージもらってるんですよ」 O…「あ、そうなん。。。お疲れさんやね」

別の男子学生には、ふらつと窓口に来て相談があるかのように呼び出されました。

J…「ちょっと聞いてもらっていいですか?」 O…「何かあったん?」

J…「いや、実は彼女できたんですよ。めっちゃうれしくて」 O…「。。。お、おめでとぅ」

J…「大学に入って二年、彼女できひんままやったんで、このまま彼女なしで卒業せなアカンのかと思って、めっちゃ焦ってたんですわ」 O…「あ、そう。」

じゃ、ホンマに良かったねえ」

また別のとき。教室機器の点検で教室にいくと、六、七名の学生たちがいました。そのうちの一人の男子が私に気づき、手を大きく振りながら、話しかけてきました。

K…「小倉さん、オレたち、めっちゃ仲良いですよな」 O…「。。。そ、うかな。。。まあ、そうやな」 T…「Kちゃん、スゲえ」

K…「ほらな。この前、晚メシ食わしてもらって。そんな、いろんな話、しましたよな」 O…「あ、したね」

T…「え、いいいな。小倉さん、今度はボクとも話しましょう」 O…「ああいよ」

K…「ダメダメ。小倉さんはオレが予約してるから。まだいっぱい話すことあるし」 T…「Kちゃん、ホンマに小倉さん好きやな。うらやましいわ」 O…「いや、『うらやましい』って、何やそ

れ。『どやまこやま』やで」

どの男子も、いろいろな活動でがんばっている、それなりに充実した学生生活を送っている学生たちです。誤解を恐れずに言うと、「男子学生はともカワイイ」というのが学生実態のひとつの特徴です。だからこそ、オヂサンたちは男子を「頼りない」と思うんだろうなあ。

かつて、「女子学生亡国論」というのがありました。「大学のレジャーランド」のひとつのエポックだった面もありますが、今、大学関係者はかなりの多数が、正課授業でも就職でも、大学院の研究でも、女子のほうが優位・元気で、一方の男子は元気がないと言われます。メディアや論者によって見解が多少異なるようですが、いつ頃から男子と女子の「力学」が逆転したのか？八〇年代末にはすでにそういう状況があったという意見もあるでしょうが、私の実感では一九九〇年代後半、とりわけ就職協定が廃止され、

就職決定のプロセスが大きく変化した時期と重なっているような気がしています。中学校あるいは高等学校の教師も、かつては小・中学生時には先に成長していた女子を、中学・高校生時には男子が追いつき追い越すのが当たり前だったのが、最近はそのような状況ではないという報告をしています。「従前の男性優位社会の権威性や価値観の崩壊の中で生き方を見失っている」という識者の見解も聞きますが、それほど単純な話でもないでしょう。

今どきの「カワイイ」男子を 励ます法

時々、このような状況を受けて、「男子を鍛える取り組みが必要だ」というような意見を耳にすることがあります。しかし、「男子をいかに元気にするか」という対策、いわば「元気の強要」ではダメではないかと思えます。この場合、第

一に、「対策」という議論の仕方をする場合には男女の比較をしてしまうと、こういう対応法にならざるを得ないわけですが、これがむしろ逆効果となりやすいと思っています。第二に、「男子の生きにくさ」「男子の育ちにくさ」という論点が重要ではないか、と思っています。第三に、男子の「育ちにくさ」「生きにくさ」が近年の学校文化・学校状況(大学も含めて)と深くかわりがあるのではないか、と考えています。

私の実感でも、確かに近年、集団のリーダー、あるいは何らかの行事のリーダーは女子が務めることのほうが多くなっているように思えます。いわばフロント・パフォーマーを増える女子学生が増えてきました。小学校・中学校時代ならともかく、高校や大学では九〇年代はじめて珍しかったように記憶しているのですが、それは喜ばしいことです。他方、「教師の目線」「大人の目線」では、フロント・パフォーマーをできそうな男子が減

ってきたという印象があるのかもしれない。しかし、リーダーというのは、フロント・パフォーマーだけではありません。今の学生たちの、とても複雑で微妙なコミュニケーション関係では、集団の中で、あるいは、リーダー集団の中でも、さまざまな役割と配慮事項があるはずです。そのようなシガラミの中で、どの役割を担えるか、どの役割を演じられるか、もう少し幅広く捉えて認めることが、男子本人にも、教師や周囲にも必要ではないかと思っています。

コミュニケーションのあり方に 関わって

数年前になります、近年の学生の発達状況を踏まえて、学生サポートルームと共催して「恋愛講座」を開催しました。予想を大きく上回る百八十人くらい参加者がいたのですが、これも予想に反して三分の二あまりが男子で、しかもほとん

どの男子には交際相手がいる、という状況でした。これだけではないですが、得てしてコミュニケーション能力の形成に課題があるといわれている男子ですが、むしろ日常生活ではコミュニケーションをとることを強く意識しており、重視するがあまり密かに悩んでいるという面があります。繰り返しますが、女子と男子の比較でどちらがどうだ、という問題の立て方をしていません。しかし同時に、男子のコミュニケーション活動は、きわめて強力に社会発信していく一部の男子と、(主観的には)コミュニケーションをとても重視しているのだけけど内向化してしまっている大方の男子、という二分化状況にあるように感じています。ただ、どちらの側にあっても、「認められたい」という欲求は非常に強い。しかし、そういう欲求をストレートな形で表現できず、他方、協調を強く意識するという面もあって、結果的に内面に抱え込んでしまふというパターンが多いと感じます。

些末な事例ですが、レポートのメロ的なで期限内に遅れてきた時、女子学生には、中にはパニックになって泣き叫んでしまう学生もいますが、遅れてきた事情とその正当性を強く訴えてきます。それに対して、全てではありませんが、大学の事情、ルール、しくみを丁寧に説明し、どこが問題であったかを納得されれば、そのように丁寧に対応すること自体も、納得を構成する要素になることが少なくありません。男子の場合、食いが落ちるということは少なく、不満・不信を抱えながら引き下がります。そういうやり取りの中で、自分がレポートを作成したという努力を認めてほしいというサインをだすことがあり、それに気づいて認めれば、それなりに冷静なコミュニケーションになる場合があります。微妙な違いですが、この「認められたい」というサインだけは、他の面では非常に単純な男子のコミュニケーション状況と違い、読み取りにくいだけでも、「認められたい」と

いう強い欲求があります。

同時に、男子は協調も強く意識します。

これは、必ずしも協調性があるという意味ではありません。むしろ状況を革新的に打開するリーダーやフロント・パフォーマーにはなりにくい要素です。しかし反面、集団の持続性や多様な構成員の取りまとめには役割を発揮するという積極面もあります。そうであれば、もっとそれを生かすこと、評価することが重要で、私なりのキーワードが、後述する「プロデュース」です。

しかし同時に、この「協調」は、時に独善で閉鎖的なコミュニケーションに、一気に転じる危険も抱えています。特に、男女の交際の仲では、特に留意する必要があります。ある女子学生が交通事故により重傷を負って入院しました。病院が確認できた連絡先はその女子学生の交際の相手の男子学生だったので、とりあえずその彼氏に連絡しました。病院は彼氏に、女子学生の両親に連絡をとるように頼み

ましたが、彼氏は拒否しました。その理由は、「自分の彼女は自分で守る」という発想です。その彼氏は、女子学生の下宿の家賃の延納を大家と交渉したり、病院や保健所に通学用の椅子を貸してほしいと交渉して回ったそうです。もちろん、周囲はそれを許容できませんから、その彼氏は「世間は二人に冷たい」と思い込み、八方塞になったところでやっと相談に来ました。

極端な事例ですが、私の理解で言うと、男子の「協調」特性が個別化、閉鎖化すると、このように正反対の現われをすることがあり、「二人だけの世界」にならなような、「ユル系」だが確かな居場所をつくっておくことが大切に思いました。

いずれにしても、男子は、できるだけ同じ目線で「愛と人生と世界平和」を語り、彼らの現時点での状況や認識(当然、悩みも含めて)を受容しつつ、楯を飛ばしたり批判するのではなく、次の発達課

題に向けて肯定的に認めることが、結局は激励、次の成長に向けた起点になると思います。対策、言い換えれば楯を飛ばしたりするような強要ではダメで、そう言うと、別に七〇年代・八〇年代とも変わらないのではないのでしょうか？男子は認めて伸びる。認めることで自己の中に次の課題が設定される。芸能プロダクション・J事務所の社長ではないですが、「YOU、いいよ。YOU、やっちゃいなよ」という感覚での接し方が、男子には必要に思います。

「十三歳のハローワーク」の呪縛

ところで、男女を問わず、学生たちを見ていて思うのは、いや、学生たちだけではなく、二十代の若い職員もそんな気がしますが、「自己実現」が大事だということ、どうも無自覚ながら自己に脅迫しているようなところがあるように思えます。就職活動早期化や複雑化の中で、なかなか「自己実現」と「進路決定」と

の整理がつかずに就職活動が前進しないという学生がよくいます。サントリー取締役で次世代研究所の佐藤由美子さんは、担当していただいているキャリア形成科目の授業の中で学生たちに、「『十三歳のハローワーク』の呪縛から自由になろう」と呼びかけられています。『十三歳のハローワーク』は、ご存知のとおり村上龍さんのベストセラーですが、全編に、「『好き』を仕事に」というメッセージがちりばめられています。一見当然のことであるかのようなこのメッセージが、実は多くの学生・若者に対する強いプレッシャーになっているようです。多くの学生にとって、「好き」が狭いにもかかわらず、あるいは、今の「好き」がライフワーク的に「好き」になっていくかどうかもわからないまま、早くから「何がやりたいか」を明らかにし、決めていくことが求められています。

ところが、世のキャリア形成では、成功モデルの提示や抽象的な自己分析の

スメが少なくありません。成功モデルの提示は、往々にして偶然性を強調しすぎたり、あるいは、初志貫徹という名の「行き当たりばったり」を強調しすぎるきらいがあるように感じます。そして何より、話を聞いたその瞬間は率直に感動はしても、共感がないため、自分にひきつけて内面に取り込むということがありません。逆に、自己分析を抽象的に、あるいはバターナリスティックに深めたところで、そう簡単に自分にとっての本当の「好き」が見つかるわけでもなく、「自分がわからない」マイナスの連鎖に陥りやすいでしょう。いずれにしても、極端な言い方ですが、「自分で自分を脅す」という方法論といえるのではないのでしょうか。それではダメです。

立命館大学教授の春日井敏之さんは、青年期の発達・成長にかかわって「自立」の課題を考えると、自分は何がやりたいか、何ができそうかという「自己実現」はもちろん大切ですが、それだけ

ではダメで、「経済的自立」(この場合、収入面だけでなく労働条件など生活と労働の力配分なども含みます)と、どこかで誰かとつながっていること、自分が大切だと実感できるような「ささやかなお役立ち感」の三つを育てていくことが大切だと言います。私も同感で、ではそれを、大学というステージでどう獲得できるように支援していくか、それが大学でのキャリア・サポートの起点ではないかと思えます。

一般的な言い方になってしまいかもしませんが、自分自身の歩んできた道を、その歩んできた自分を、そしてこれから歩んでいくのであろう自分を、確認し認める作業が大事だろうと思えます。学生自身にとってはキャリアをデザインする、ということだと言えますが、それと関わる大学あるいは教職員にとっては、学生が自身と周囲をプロデュースする力を育てる、「学生の・セルフ・プロデュース」をプロデュースする観点が大切だ

と感しています。そして、特に男子学生がこのような力を身に付けてくれれば、「元気がない」と見られる状況を変え、契機にもなると、私は見えています。

プロデューサー論

ところで、プロデュースとは何か？先日、『踊る大捜査線』などのプロデューサーとして有名なフジテレビ映画事業局長の亀山千広さんに授業をしていただきました。

この授業は「音楽・文化産業論」といい、日本レコード大賞の審査員などでも活躍していた音楽評論家の反畑誠一さんをト

ータルコーディネーターとして、ユニバーサル・ミュージック会長やエイベックス会長、あるいはスピッツや平井堅の音楽プロデューサーなど第一線の方々に各回の講義をご担当いただくという「超豪華」科目です。著作権問題を縦糸に、音楽産業の戦略と実態を横糸とし、現代社会を「市民一人ひとりが総表現者」の時代と捉えて、コンテンツ・ビジネスと著作権問題を学びます。(ちなみに、この科目は講義録をホームページで公開しています。興味のある方はぜひご覧ください。

こ。 <http://www.risumei.ac.jp/acd/cg/ss/07/jasrac/koutki/index.htm>

亀山さんご担当の回は「私的プロデューサー論」と題し、亀山さんのご経験から、プロデューサーの仕事と役割について話されました。

「僕の最初の「プロデューサー」は、僕がまだ大学生のときでした。その頃インベーダーゲームがはやっていました。学生街のたいていの喫茶店にはインベーダーゲームが置いてあって、どこの喫茶店でも客寄せのために、ゲームで最高得点を出せば1週間コーヒーが無料になるというサービスをしていました。そこで僕はゲームのうまい友達に二千元を渡し、「このお金でゲームをしてもいいから最

高点を出してくれ。そのかわりタダになったコーヒーは俺のだぞ」と言いました。店の人も承諾してくれたのでさっそく実行にうつすと、彼は七百円で最高点を出してしまいました。僕は一週間コーヒーがタダになって、しかも千三百円のおつりまできたんです。これがプロデューサーです。僕は三十年経った今もこれと同じ事をやっています。友達は、人のお金で大好きなゲームを何時間もやって、新記録を取ったという名誉まで手にしました。これは会社のお金で映画を作った映画監督が、賞をとって名誉を手に入れることと同じです。このときの「一週間コーヒーをタダにしたい」というさもちが、僕のビジネスとなりました。僕の最初のプロデューズです。」

「僕が学生時代に見ていた映画は、ゴダールやATG系のアートものばかりで、そういう映画を観て分かったフリをしていたし、それが自分のスタイルだと思っていました。だけどテレビ局に入っ

た瞬間に、鍵をかけて封印したんです。そしていざ自分が好きなものを作るボジションになって、その箱を出して鍵を開けようとしたが、鍵が見つかりません。自分の中にあつた「見せたい欲求」はいつの間になくなって、皆さんが見たい欲求に対して自分の知恵をどれだけ使えるか、ということばかり考えるようになっていたんです。「見せたい欲求」はアーティストの欲求です。プロデューサーは、「お客さんの見たい欲求に応える」ということです。そのとき、自分が体験してきた記憶を引き出すんです。」

「記憶は、どんな「捏造」されていきます。恋愛を主題にしたドラマを作るときは、自分の学生時代の恋愛を思い出します。僕は学生時代に彼女を妊娠させたこともないし、恋人が死んだという経験もありません。それでもそういう物語も作れと言われれば、あの頃を思い出すしかない。そして当時の彼女のことを思い出して、「新垣結衣に似てたなあ」と思

い込む。実際は似ていなくても、そう思い込むんです。」

この講義を聴いて、とても共感しました。学生たちとかかわり、相談にのつたりする時、指示的であつたり、「上から目線」のアドバイスではなかなか伝わらなくて、むしろ、「キミがこういうところを見てみたいねん」とオーダーする時の方が、学生、とくに男子学生の受けとめがいいという実感があり、それと共通するように思いました。

「学生のセルフ・プロデューズ」をプロデューズ

「大学教育のあり方だ」とまで大層なことはないませんが、いま、学生たちを見ていて大事だと思うのは、この、学生が自己と周囲をプロデューズする、そういう力を育てることだと思えます。今、「ピア・エデュケーション」とか「ピア・サポート」などのピア活動が目目され

てきていますが、大学生においてこのピ
ア活動には、方法論としての「学生同士
が学びあう」「仲間同士が支えあう」と
いうレベルを超えて、「学生が自己と周
囲をプロデュースする(し合う)」、言い
換えれば自治性を据えることが大切で
す。

近年、FD活動の発達やさまざまな教
学改革を進めてきている中で、正課授業
の実践水準はかなり高まってきているよ
うに思います。社会学者のブルデュー風
に言うと、従来の正課授業ではプラクシ
スな知だけだったものが、最近ではプラ
チックな知をも求め鍛えるようになって
きていると思います。しかし、学生たち
が大学で「学び成長する」と考えたとき、
正課カリキュラムは、残念ながら「学び
成長する」筋道には見えず、多忙化する
学生生活の中で、正課授業にそうは腰を
すえて望むことができにくい面がまだま
だあると思います。

他方、旧来の課外活動は、いわば「好

き」をキャンパスライフに」という言い
方で置き換えられると思います。これま
では課外活動で学生が伸びるとは言われ
てきましたが、最近では、むしろ視野を
狭くしかねない面、あるいは、これまで
に経験のない組織活動、組織維持という
責務にたじろいでしまうという面も、正
直にいつて、生起し始めているように感
じます。

これまで、大学論において折にふれ議
論されてきた「正課」と「課外」の関係
を、学生の「学びと成長」を視座に読み
解きなおすべき時期が来ています。「正
課も大事だが課外も大事」、あるいは「正
課と課外のそれぞれの長所を生かして」
という、正課・課外二元論ではなく、大
学での「学びと成長」というステージに、
どういう作品をプロデュースできるよう
にしていくか、という整理が求められて
いるように思います。

もう一つ、この文章では、男子学生を
論じています。男子学生の積極面あるい

は成長の「環」を、しかも「温かい目線」
で語るものが、世間にはあまりに少ない
ということを感じており、そ
の点をもう一つの軸に見ました。

それにしても、学生たちとの一見他愛
のないかわりあい、しかしそれが契
機となって、学生たちがさまざまな活動
で活躍していくのを見送るという、この
微妙な「置いてけぼり」感は本当に楽し
いことです。大学事務職員の高度化はと
ても大切で、私も、「アドミニ」という
コトバが流布する以前から、そういう職
員像が重要だと考えてきました。しかし、
何となくではありませんが、「アドミニ」
という響きには、この様な学生との関わ
りあいとは無縁っぽい印象をどうしても
感じてしまいます。今、私が向き合っ
ているような学生たちとのかわり方も捨
てがたく、「やっぱり自分はアドミニに
は向かないなあ」と勝手に思っているこ
の頃です。